

6章 イギリス独立党と EU 離脱

ハワード エドモンド 通一

● イギリス独立党の特徴（161~162 頁）

1. 「ポピュリズムの影響を受け、『デモクラシー』の論理を突きつめて国の行く末を決することの功

罪」を示した。

『デモクラシー』の論理を突きつめて国の行く末を決する = 国民投票

2. 「国民投票であぶり出された『置き去りにされた人々』の存在」

● イギリス独立党の躍進（162~173 頁）

○ 「欧州議会選挙を足掛かりに」（~2009）（162~166 頁）

1. 「欧州議会」⇒権限が限られていたため有力政党は注力しなかった

⇒「新党の『実験場』」（164 頁）

2. 農村部の「『保守的』有権者」⇒「保守党の伝統的な支持層と重なり合う人々」

= 「ローカリズム（地元主義）を重視する保守系の支持層」

⇒労働党政権の「都市重視の現代的政策」への反発

○ 「ファラージによる支持層拡大」（2009~）（166~169 頁）

1. 「2010 年に党首として再登板したファラージュ」

⇒「反 EU の単一争点政党という党のイメージの払拭を図り、移民問題を積極的に取り上げ

るとともに、既成政党への批判を繰り広げ」た。

2. イングランド中部・北部の工業地帯の支持層の開拓（167 頁）

= 労働党の支持基盤 ⇒産業構造の変化による衰退

⇒こうした「失業率や社会保障の需給率が高く、政治に対する不満が強い」地域で活動

し、支持基盤を開拓したとされる。

⇒保守系の農民に加え、労働者が抱く「グローバル都市ロンドンに対する地方の不満、地域間格差に対する反発」を掬い上げた。

3. フォードによる支持層の分類（168~169 頁）

- 「『保守的』なイギリス独立党支持者」（168 頁）

= 「保守的な地盤」に育った「比較的豊かな中間層」

⇒ 「EU に対する反発」が主な姿勢で欧州議会選挙でのみ独立党に投票し、支持する既存「政党の EU に対する態度をより批判的な方向に向けることを意図する」

- 「『中核的』なイギリス独立党支持者」（169 頁）

= 「労働党支持の家庭に育った」「労働者階級の出身者」

⇒ 「経済的に不安を抱えるなかで」既成政党に「幻滅してイギリス独立党支持者に移行した人」で、「移民や外国人に対する反感」や「既成政党に対する全般的な不信」を抱く

○ 「節度あるオルタナティブとして」（170~171 頁）

⇒ 「極右色の強いブリテン民族党」の新ナチズム的、急進的なイメージを持たない「節度あるオルタナティブ（選択肢）」として「より豊かな層や女性に支持を広げ」た。

○ 「政治の表舞台へ」（171~172 頁）

- 2014 年欧州議会選挙⇒第一党
- 2015 年総選挙でも得票率が大幅増加

- 「『置き去りにされた』人々」（173~）

○ 「『置き去りにされた』人々」（173~176 頁）

= 「長期にわたる社会経済的な変容」により「社会の周縁部に追いやられ」た「中高年」の「低学歴

な白人労働者階級」で「『権威主義的』な社会規範」を持つ者が多い。

⇒「『コスモポリタン』的」な価値観を持つ「若い高学歴の世代」との「社会的分断」

○ 「政党政治の中道化」(176~178 頁)

⇒「主要政党が高学歴の中間層を明確にターゲットに置き」、「労働者層では、既成政党が自分たちの関心を代表していないという不満が鬱積していく。」

⇒既成政党は「中高年の労働者層を『見捨てて』きた」

⇒独立党は「移民問題を俎上に載せるとともに、既存の政治システムに対する不満、既成政党に対する批判を全面的に展開していった。」

○ 「チャブたち」(178~180 頁)

=「都市の豊かな中産階級が、落ちぶれた地域に住む労働者階級に向ける『まなざし』。」「職に就くこ

ともまならない労働者階級の人々には、『怠惰』のレッテルが貼られ」た。⇒社会的分断の象徴

● EU 離脱国民投票と衝撃の結末 (180~185 頁)

⇒顕在化した「中間層の支持集めに汲々とする既成政党と『置き去りにされた』人々との断絶」

⇒「ヨーロッパ志向のエリートたちが進める EU 統合は、」「雇用や移民をめぐる問題をないがしろにするものと見られることによって、不信の念をもって受け入れられた」

⇒EU 離脱賛成票が上回る

● イギリス国民党と EU 離脱国民投票が示したポピュリズムの功罪 (185~187 頁)

功:「『置き去りにされた』人々」が「デモクラシーを再びわがものとするまたとない機会を」得た。

罪:「侮蔑的なまなざしを言語化し、『正しい批判』としてのお墨付きを伴って言語空間に流布させる」

機会を与え、社会的分断を深めた。